

セッション名：心電学フロンティア 2013（第48回理論心電図研究会）

座長：三田村 秀雄（国家公務員共済組合連合会 立川病院）

心臓に何らかのストレスが加わったとき、心臓はそれに耐え、可能な限りもとの状態に戻るべくネガティブ・フィードバックが働く。当初は神経体液性因子を介した即時型の機能的反応が中心となるが、そのストレスが持続すると、今度は種々の蛋白合成の変化が細胞膜、あるいは筋小胞体など様々なレベルで緩徐に進行する。この適応現象のための蛋白レベルの変化を一般的にリモデリングと呼ぶ。リモデリングは必ずしも良い適応反応だけとは限らず、生体が機械的機能回復を優先する結果、しばしば電氣的犠牲を伴うことがあり、収縮不全に陥った心室筋にリモデリングが生じると心室性不整脈を、心房にも変化をきたすと心房細動を合併するようになる。しかもこの心房細動は続けば続くほど、自然停止しにくくなり、薬剤抵抗性となる。このようにリモデリングは様々な形で不整脈を誘発するが、その解決には抗不整脈薬のように単に細胞膜レベルだけを標的とするのではなく、より原因に即した治療、リモデリングをリバースする工夫が重要である。本心電学フロンティアでは、そのような不整脈の裏側に焦点をあてて、複雑な不整脈の発生機序への理解を深め、その対処法を論じてみたい。